

---

TODSERIES ~ 其の後の物語 ~

平塚周太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TODSERIES ～その後の物語～

### 【Nコード】

N2369Z

### 【作者名】

平塚周太

### 【あらすじ】

神の目の争乱の終結から約三十年、語る人のいない英雄の活躍から十年人々は忘れ平和な日々を送る。

そんな平和な世界でも未だ残る文化。レンズによる文化である。神の目の争乱の後、衰退を見せたが、よりよい生活を望む人たちがエルレインが見せた奇跡により、レンズの可能性を見直した科学者により

レンズ文化は徐々に、しかし確実に前へと進んでいった。

そして、レンズ文化の復活によりレンズの需要が高騰。  
それにより、各地でレンズハンターが復活した。

そんな中、また英雄の血を引いた子達が世代を越えて出会う。

## プロローグ（前書き）

プロローグです。

でも本編のスタートは少し先となります。

## プロローグ

神の目の争乱の終結から約三十年、人々は忘れ平和な日々を送る。語る人のいない英雄の活躍から十年、存在理由を無くし守る物のないアタモニの人々は  
本当の意味で宗教団になった。

そんな平和な世界でも未だ残る文化。レンズによる文化である。神の目の争乱の後、衰退を見せたが、よりよい生活を望む人たちがエルレインが見せた奇跡により、レンズの可能性を見直した科学者により

レンズ文化は徐々に、しかし確実に前へと進んでいった。

そして、レンズ文化の復活によりレンズの需要が高騰。

それにより、各地でレンズハンターが復活した。

また、古都ダリルシェイドは旧ヒューゴ邸にあったレンズ製品や設計図などを求めて

今は古都から新都、一番賑やかな国となっている。

そして、アタモニ神団のお膝元アイグレットは神団の科学者によりダリルシェイド以上の発展を見せた。

そんな中、また英雄の血を引いた子達が世代を越えて出会う。

## TOD2 その後(前書き)

今回はTOD2メインでEDの後の話です。

## T O D 2 その後

「は〜」

兄が死んだ。でも無駄死にはない。敵の大将ミクトランと相打ちになったのだ。それで十分かもしれないが今は違う。

「アイツ未来で生き返っちゃうんだからね。」

兄の墓の前で立っていると急にめまいがして記憶が出来た。千年後の世界での仲間との旅神との戦い全てをだ。

「まっどうせ又やられるからいつか。」

しかし、私も記憶が戻ったことを仲間に伝えたい。どうするか。

「あ！あった。」

私にしか出来なくて絶対に仲間に伝える方法が。

「さっそく準備準備〜」

俺とリアらがラグナ遺跡から戻るとロニも記憶を戻していた。

そして、古都ダリルシェイドヒューゴ邸前

「しかし、本当にジューダスの野郎いるのか？」

「絶対いる！俺には分かるんだ。きつとあそこにいる！」

「でも正面から堂々とは入れないでしょう。どうやって行くの？」

「う・・・それは」

「じゃあ水道管から入るか。」

「え〜〜また戦うの？」

「いいだろ神にも勝ったんだからもつとしっかりしろよ。」

「そのこの三人組さつきから屋敷の前で何をしている。」

「やべ見つかったぞ、逃げろ。」

「え、もう見つかったの。」

「いいから早くしろリアラ！」

「で、でも・・・カイルが」

「リアラーロニー助けてー」

「よし、こいつがどうなってもいいのか？」

「・・・（カイルのバカ）野郎」

牢屋に行くときのみんなの顔が怖かったけどすぐに変わった。

扉が閉まって少ししてリアラがやロニが

「おいジューダスーいないのー？」

「おいジューダスーいるなら返事しろー。」

「何やってんの二人とも??」

「ジューダスを捜してるに決まってるだろう」でしよう。」

「あのジューダスがこんな所にいるわけ。」



「お前の頭はどうなっているんだ？」  
「「「ジューダス！！！」」」

## TOD2 その後（後書き）

はい、ちょっととした無茶ですが今後とも何度もやると思っています。

設定やキャラ崩壊が起きると思いますがどうぞよろしくお願いします。

## TOD2 その後　蘇った人

「……ジューダス!!!」

「カイルはともかく何故お前達まで驚くんだ。」

「分かっているも上から人が降って来られるのはな以外と驚くもんだぞ。」

「ねえロニ? 何でジューダスが居るのが分かったの!？」

「……本当に覚えてないか? カイル」

「うん。」

「まさかここまで馬鹿とはな。」

「カイル、思い出せ、らぐな遺跡の後俺達は捕まってこの牢屋に入ったよな。」

「うん。」

「その牢屋に誰がいた？」

「あ! そっか! だから分かったのか、ロニツ頭良い」

「お前は前のままなのにこいつは何故退化している？」

「カイルだもの、しかたないじゃない。」

「ふっ、そうだな、考えた僕が馬鹿だったな。」

「そっだぞジューダス。カイルのことを考えても無駄骨だぞ」

「みんな酷いよ。」

この後俺達はヴァザーゴを倒してアイグレットテへ向かった。そして思いもよらぬ人と再会する。

アイグレットの町 宿

「オジさん。四人部屋開いてる？」

「おお、開いてるぞ。じゃ代金は……」

「オーイ！エルレイン様が帰ってきたぞ。」

「……！！……！！……」

「おお、そうか。すまんなお前さん達、少し待っててくれ。」

## TOD2 その後　蘇った人

「オイ！何でアイツまで蘇ってるんだよ！」  
「分からないわ。」  
「とにかく、外に出るぞ。」

町中

「貴方達に　祝福が有らんことを。」  
「フアアア」  
「おお、傷が治っていく。」  
「お母さん！足が、足が動くよ。」  
「おおお！」

「しかし、何度も同じ事やるな。」  
「いいえ違うわ。今のは力じゃない唱術のみよ。」  
「でも、何故蘇ったんだ？」  
「きっと人を助けたいのよ本心から、自分の意志で。」  
「あ！見て！」  
「なに！エルレインが遊んでいるだと！」  
「それに……」  
「ああ、笑っているな。」  
「あ、コツチ見た。」  
（我が妹と仲間の皆さん。私は前の様な事はしません。リアラの考えを代わりにやることにしました。だからリアラ、安心しなさい。）

必ず人を自立させ、私達の必要ない世界にして見せます。あと、帰  
つて来る時は皆さんで神殿にいらしてください。待っていますよ。(  
そしてエルレインはこちらに微笑んでから神殿には行っていった  
「い、今は」  
「なんか、変わったね」  
「ええ。良かったわ。本当に。」

そして俺達の一日目は幕を閉じた。

アイグレット港

「ねえ、ジューダス？あれどうする？」

「……」

アイツ等の依頼をどうするか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2369z/>

---

TODSERIES ~ その後の物語 ~

2011年12月10日01時49分発行